様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　８ 日現在

機関番号：１２６０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０２５８６

研究課題名（和文）クロソウスキーにおける「神の死」の概念の射程

研究課題名（英文）The Range of the Concept of "Death of God" in Klossowski

研究代表者
大森　晋輔（Omori, Shinsuke）

東京藝術大学・音楽学部・教授

研究者番号：５０５９９２７２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：フランスの作家ピエール・クロソウスキー（1905-2001）の思想において、ニーチェ的な意味での「神の死」の概念がどのような影響を及ぼしているのかを探るのが本研究の目的である。研究期間内においては、1930年代にクロソウスキーがキルケゴールに寄せた関心とこの概念の関係を探り、ついで、第二次世界大戦後に彼が行ったニーチェ研究の特徴をこの概念との関係で探った。以上の研究により、これまであまり明確に示されてこなかったこの思想家における「神の死」の影響をある程度明確に示すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、20世紀のフランスの作家クロソウスキーが受け止めたニーチェ思想のありようを「神の死」という概念を軸に考察したものである。現代という、「神なき時代」にまで通じる普遍的な問題意識をこの作家は生涯を通じて先鋭的に考え抜いた。その活動を3つの時期に分け、そのいずれにおいてもこの「神の死」の問題が根底に流れていることを示し、大きな参照軸を失った現代の人々がそれでもなお生きていくためのヒントがその思考に隠されていることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to explore the influence of the concept of " death of God" in the Nietzschean sense in the thought of the French writer Pierre Klossowski (1905-2001). During the course of the study, the relationship between Krosowski's interest in Kierkegaard in the 1930s and this concept was explored, followed by an exploration of the characteristics of his post-World War II Nietzsche studies in relation to this concept. Through these studies, we have been able to show the influence of the "death of God" on this thinker, which has not been so clearly demonstrated in the past.

研究分野：フランス文学、思想

キーワード：クロソウスキー　神の死　ニーチェ　バタイユ　キルケゴール　永遠回帰

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

筆者は本研究期間以前の研究で、クロソウスキー作品の底部には「伝達不可能なもの」を伝達しようという欲望が横たわっていることを、その作品に随所に見られる演劇的要素との関連で示してきた。筆者はこのテーマを、広い意味での「新たな言語形式の探求」と捉え、その作品に随所に現れる演劇的要素を加味しつつ、著書『ピエール・クロソウスキー――伝達のドラマトゥルギー』（左右社、2014 年）で詳しく論じた。この論点は、現代文学や思想における言語やイメージといった問題を考える際にもきわめて有効になると思われた。

しかし一方で、こうしたクロソウスキーの「伝達」（communication）への関心の背景には、より根本的な問題、つまりキリスト教的な意味での「神の死」という認識、さらに言えば神なき時代における共同体（communauté）のあり方への関心が一貫してあるように思われた。それゆえにこそ、彼はその初期からニーチェのみならず、サドやバタイユに対しても絶えず思考を巡らし、時には深刻な思想的葛藤を続けたのである。ニーチェを恣意的な政治利用から可能な限り遠ざけようとし、その問題提起を正面から受け止めようとするクロソウスキーにとって、「神の死」は人間の解放を意味するのではなく、むしろ自我の保証人を失った人間のあてどない彷徨が始まったことを意味すると同時に、人間自らが殺した「神」の遺骸と向き合い続けることでもあった。

だが、特に若い時期（1930 年代）の新資料が明らかにされつつあるにもかかわらず、その頃のクロソウスキーが直面していた「神の死」にまつわる深い宗教的な葛藤も含めて論究の対象にしている研究は見当たらない。筆者は、これまでのクロソウスキーの言語への関心についての研究を発展させつつも、その問いの射程をさらに西洋の思考に関わる根本的な問題へと広げなければならないと考えた。その問いとは、クロソウスキーが受け止めた「神の死」に基づく思考が、これからの共同体のありようを考察するうえで今後どの程度まで可能性を持ち得るものなのかというものであり、本研究の背景にあるのはそうした問いである。

２．研究の目的

本研究の目的は、クロソウスキーにおけるニーチェの「神の死」の思想の影響の変遷をたどりながら、そのそれぞれの時期において彼が獲得した視座が、「神の死」以後の時代にとっての共同体のあり方を考える上でどのような可能性を持ち得るのかを明らかにすることである。

３．研究の方法

まず基礎的な作業として、クロソウスキーがニーチェについて論じたすべてのテクストを精読し、その中で「神の死」という問題がいかに扱われているのかを洗い出した。そして、「神の死」への思索に関わるクロソウスキーの執筆活動を大きく前期・中期・後期に分け、まず前期（第二次世界大戦終結まで）におけるキルケゴールに対するクロソウスキーの関心がどこにあったのかを探った。なぜキルケゴールに注目したのかと言えば、当時のクロソウスキーが、ニーチェと対比する形でキルケゴールをかなり深く読み込み、その成果を「キルケゴールによるドン・ジョヴァンニ」というタイトルで『アセファル』（3–4 号、1937 年）に掲載していたからである。これは戦後に出版される『わが隣人サド』(1947)に収録されるが、20 年後の再版では削除されている。これは、キルケゴールとの対峙が、サドやニーチェとのそれと同様、若き日のクロソウスキーにとってそのまま「神の死」の問題に対峙することでもあったことを示していると同時に、キルケゴールに対するクロソウスキーの心理的距離感がのちに生じたことをも示している。

ついで、中期（戦後から 1950 年代まで）のクロソウスキーのニーチェ解釈に焦点を当てた。ここからのクロソウスキーは、ニーチェの『悦ばしき知識』の仏訳などを行いつつ、本格的にニーチェ研究に手を染める。ここでの彼の関心がどこにあったのかを探りながら、その「神の死」に関する問題意識を探った。

最後に、後期（1960 年代以降）のクロソウスキーのニーチェ解釈を探った。1969 年にクロソウスキーはそれまでのニーチェ研究の集大成ともいえる『ニーチェと悪循環』を上梓するが、そこにおける「悪循環」というキーワードに注目し、「神の死」の概念との関係において、それが本書を読み解く上でどのような役割を果たしているのかを検討した。

４．研究成果

研究期間の間に、口頭発表や論文執筆を通して、上記の研究方法をもとにした以下のような成果をあげることができた。

(1)まず、キルケゴールとニーチェに関わるクロソウスキーの考察の検討に関しては、2018 年 2 月 4 日に筆者が主催した学術シンポジウム「シンポジウム「多様」と「特異」の作家――いま、

クロソウスキーを（よ）みなおす」で口頭発表「「クロソウスキーにおけるキルケゴール――1930年代後半の活動から」を行い、それをもとに執筆した論文が、2020年11月に刊行された筆者による編著『ピエール・クロソウスキーの現在――神学・共同体・イメージ』に掲載された。これにより、若き日のクロソウスキーがなぜキルケゴールに惹かれ、書かれた論文をなぜ『わが隣人サド』に収録し、またなぜのちにそれを削除したのかといった問題が、「神の死」をめぐるクロソウスキーの意識にかかわっていることが明らかにされた。一言で言えば、クロソウスキーのキルケゴールへの当時の関心は、ニーチェ同様にキルケゴールが示した「ディオニュソス的なもの」への関心に基づくものであり、クロソウスキーからすればそれはサドにもバタイユにも関わっているものでもあった。しかし、クロソウスキーの関心は次第にキルケゴールから離れていき、代わって浮上したのが、ニーチェが認識した「神の死」がクロソウスキーにとって「（超越的なものに対する魂の情熱としての）エロスの死」でもあり、そこをどうとらえ直していくかという問題意識だった。上述の編著に収録されたクロソウスキーによる対談などの翻訳も、この研究を進める上で大いに役立ったことも付記しておく。

(2)ついで、2019年に刊行した論文「クロソウスキーにおける『神の死』と『永遠回帰』――ニーチェ『悦ばしき知識』仏訳序文（1956）読解」で、筆者はクロソウスキーが戦後に手を染めたニーチェ研究の特徴を洗い出しながら、自らが手がけたニーチェの仏訳の序文として載せたテクストを読解した。このテクストを、それと同時期に書かれた「ニーチェ、多神教、パロディ」（1958）と併せて読むことで、筆者が「後期」として分類した1960年代のニーチェ解釈、とりわけ「神の死」と「永遠回帰」を「悪循環」というキーワードで捉え直すというクロソウスキーの解釈が、この時点ですでに先取り的に現れていることが判明した。ここでのクロソウスキーの主張の構成原理となっているのは、「神の死」が意味するものとは結局のところ何か、そしてそれに直面したヨーロッパ人は以後どのような生の条件を見出すべきなのかという問いであった。

(3)最後に、2021年5月8日に開催されたクロソウスキー・シンポジウムでの口頭発表「クロソウスキーと〈悪循環〉」、およびそれをもとにした論文「クロソウスキーと『悪循環』」（2022）において、筆者は主に『ニーチェと悪循環』(1969)の前半部分の考察を通じて、ニーチェの中心的概念である「神の死」、「永劫回帰」、「力への意志」の謎を、「神トイウ悪循環」（circulus vitiosus deus）というニーチェ自身が発した鍵語を通じて解きほぐそうとしているクロソウスキーの姿を明らかにした。同時に、このニーチェ論は、ニーチェをめぐって、あるいはニーチェを通して、クロソウスキーの「神学」的考察を十全に展開する試みでもあったことも示された。「神トイウ悪循環」とは、「神の死」以後も、隙あらば中心を占めようと回帰してくる（西洋の伝統的な）既成の「神」を一定の距離に保持する、いわば防波堤のようなものとして機能していると同時に、「永劫回帰」が絶えず要求する「神的思考」をニーチェに不断に促し続けるものでもあった。

　ちなみに、筆者によるこの論考では扱われていない『ニーチェと悪循環』の後半部分では、前半部分の考察をステップにして、「共同体」の問題への問いがさらに開かれていくのだが、本研究期間中には残念ながらそこまでを論じきることはできなかった。しかし、研究期間全体を通じて、クロソウスキーの活動の前期・中期・後期それぞれの思索に、いかに「神の死」の問題が影を投げかけているのかが明らかになったということは言える。そして、この研究期間以前に筆者が研究を続けていたサドとバタイユに対するクロソウスキーの思考も、この「神の死」の問題に大いに関わりがあったことも明らかになっている。この期間での研究成果が、今後の発展に大いに寄与することが期待される。

　最後に、前述の編著『クロソウスキーの現在――神学・共同体・イメージ』（2020）を本研究期間中に上梓できたことは本採択事業での大きな成果であったことを強調しておきたい。本書は、科研費の助成を得る形で2018年2月4日に行われたクロソウスキー・シンポジウムの記録（論文7点）であると同時に、クロソウスキーに関する未訳の文献を多数翻訳し（クロソウスキーによる論考5本、対談2本、クロソウスキーを論じた論考3本）、詳細な年譜を付したものである（さらに、これを機にクロソウスキーに関する網羅的な書誌情報を整え、筆者が運営するホームページに掲載し、随時更新している）。本書は、ここ 10 年程の海外の研究動向を見据えつつ、各著者がそれぞれの関心や専門分野に関する見地から新たなクロソウスキー読解を試みたもので、未だ十分に進められているとは言えなかった国内のクロソウスキー研究の発展と促進にとってきわめて重要な意義を持ちうるものである。

　さらに、奇しくもクロソウスキー没後20年の年となったが、この刊行を記念する形で2021年5月8日に行われたオンライン・シンポジウム「歓待・倒錯・共犯性――ピエール・クロソウスキーの思想をめぐって」もまた、本採択事業のもたらした間接的な成果と言ってよい。日本のクロソウスキー読解を牽引してきた専門家と若手の研究者、そして現代哲学や中世哲学の専門家が新たに加わり、さまざまな角度からクロソウスキーの思考をめぐって発表と充実した討議を行った（後者の討議の模様は、『週刊読書人』に各発表者のサマリーとともに一部掲載されたのち、『読書人 web』に全文が掲載された。さらに各発表そのものも、2021年8月に水声社のメールマガジン『コメット通信』において文章化されている）。こうしたことによって、クロソウス

キーに関する研究が活性化し、新たな広がりを見せ始めている。科研費の助成をいただいたことに心より感謝したい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 大森晋輔	４．巻 44
２．論文標題 クロソウスキーにおける『神の死』と『永遠回帰』――ニーチェ『悦ばしき知識』仏訳序文（1956）読解	５．発行年 2019年
３．雑誌名 東京藝術大学音楽学部紀要	６．最初と最後の頁 17-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大森晋輔	４．巻 なし
２．論文標題 クロソウスキーにおけるキルケゴール――1930年代後半の活動から	５．発行年 2020年
３．雑誌名 クロソウスキーの現在　神学・共同体・イメージ	６．最初と最後の頁 88-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大森晋輔	４．巻 なし
２．論文標題 有罪性から共犯性へ――2021年5月のクロソウスキー・シンポジウムを終えて	５．発行年 2021年
３．雑誌名 コメット通信	６．最初と最後の頁 37-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大森晋輔	４．巻 47
２．論文標題 クロソウスキーと『悪循環』	５．発行年 2022年
３．雑誌名 東京藝術大学音楽学部紀要	６．最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 大森晋輔
2．発表標題 クロソウスキーにおけるキルケゴール――1930年代後半の活動から
3．学会等名 シンポジウム「多様」と「特異」の作家――いま、クロソウスキーを（よ）みなおす（招待講演）
4．発表年 2018年

1．発表者名 大森晋輔
2．発表標題 クロソウスキーと〈悪循環〉
3．学会等名 『ピエール・クロソウスキーの現在 神学・共同体・イメージ』（水声社）刊行記念シンポジウム「歓待・倒錯・共犯性――ピエール・クロソウスキーの思想をめぐって」（招待講演）
4．発表年 2021年

〔図書〕　計3件

1．著者名 大森晋輔（編）	4．発行年 2020年
2．出版社 水声社	5．総ページ数 352
3．書名 ピエール・クロソウスキーの現在	

1．著者名 オード・ロカテッリ（翻訳）	4．発行年 2019年
2．出版社 白水社	5．総ページ数 184頁
3．書名 二十世紀の文学と音楽	

１．著者名 モーリス・ブランショ	４．発行年 2017年
２．出版社 筑摩書房	５．総ページ数 488頁
３．書名 『終わりなき対話Ⅱ　限界-経験』（共訳）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関